

英語科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 英語科では「**世界の人々と心でつながる人**」を育みたいと考えている。「世界の人々と心でつながる人」の土台となるのは「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」である。

「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」をもつ人は、自分の思いを「わかってもらおう」としたり、相手の思いを「わかろう」としたりする中で、自分のもっている英語力（読む・聞く・話す・書く）を最大限に生かして、粘り強く創意工夫を凝らしたコミュニケーションを図ることができるだろう。

また、「自他共に大切にできる人間力」をもつ人は、自らの思いを大切にしながら、相手の文化や価値観を受けとめ、理解し、新たな価値観として受容することができるだろう。さらに、言語的・文化的背景の異なる他者とのかかわり、心から理解し合うための視野や考え方の幅を広げることができるだろう。

15 これら2つを土台に、多様な言語や文化・価値観をもった人々との出会いを肯定的に受けとめ、自らが紡ぐ言葉で理解し合うことで人とのつながりを豊かにしながら、それぞれの未来を広大なフィールドの中で切り拓いていくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

20 英語科が願う子どもの学びは、**自分とは異なる思いや価値観をもつ相手と英語でのコミュニケーションを繰り返す中で、自分の思いを「わかってもらおう」とすることと、相手の思いを「わかろう」とすることを大切に、「よりよいコミュニケーション」に迫ること**である。そのため、子どもたちの感情を揺さぶり、コミュニケーションを繰り返したくなるような学びを次のように進めたい。

相手意識をもった学び

25 相手の言語的・文化的背景に寄り添い、よりよいコミュニケーションに迫ってほしいと願っている。子どもたちは、自分の思いを「わかってもらおう」としたり、相手の思いを「わかろう」としたりするためには、相手への配慮や粘り強く伝える意志、相手の意図をくみとろうとする意思が大切だと実感するだろう。例えば、話し手としては、「相手に伝わってなさそうだ」「具体的な説明をした方がよさそうだ」などと考えることが当てはまるだろう。聞き手としては「相手が話しやすいような相づちを打とう」「もっと相手の

英語表現を追求する学び

35 自分自身の紡ぎだした言葉が「伝わった」と感じたり、相手の思いや考えが「わかった」と感じたりすることは、言語を学ぶ大きなきっかけとなる。このような喜びや達成感に満ちた体験をしながらも、「うまく伝えられなかった」「よくわからなかった」という実感も肯定的にとらえたい。子どもたちにとって、このような実感は「どんな表現なら伝わるのだろうか」「相手は何を伝えたかったのだろうか」などと、相手との心からのつながりを求め、英語表現を追求する原動力となるだろう。そこで、英語表現と向き合う時間を子どもたちの思いに応じて十分にとり、子どもたちが伝えたいことやわかりたいことを引き出していききたい。そうすることで、子どもたちは言葉の選択にこだわったり、相手の言葉に込められたメッセージを味わったりするだろう。このような学びを通して、英語そのものもつおもしろさを味わいながら英語表現の幅を豊かに広げることが願っている。

40 これらの学びを通して、自分の思いと相手の思いを重ね合わせながら、様々な視野や考え方の幅を豊かに広げ、それぞれの未来を切り拓いてほしい。